

がんと一緒に歩こうや

2011年07月03日



「がんとは執念深くつきあっていく」と話す芝田さん。手首にまいつも、RFLの紫のリストバンドが＝福岡市東区松島1丁目

■「リレーフォーライフin福岡2011」実行委員長 芝田良倫さん(48)

がん患者や家族、友人らが、交代で24時間歩き続ける「リレー・フォー・ライフ(RFL)」という催しがある。励まし合い、寄付を募る命のリレーは、米国から世界に広がっている。福岡で3年目となる今年、実行委員長に就いた。

1999年、大腸がんと診断された。だが、当時は大腸腫瘍(しゅ・よう)としか告げられなかった。1人だけ知らないまま時は過ぎ、病名を知ったのは8年後。生命保険の契約内容を変えようとした時だった。「がんで瀬戸際やったんやろ」。保険の外交員のつぶやきが「告知」になった。

RFLを知ったのは09年。この年、福岡でRFLを始めた宮部治恵さん(42)を紹介した新聞記事がきっかけだ。「がんになりながら命を救われた。同じ経験をした女性が一生懸命やっている。だったらおれもやらなきゃって」

RFLの原点は語り合い。それを大切にしようと、2月から月1回、市内で患者らが語り合う「語ろうや」を開催。6月18日には福岡・天神で文化祭を開いた。

文化祭では、専門医らの講演に続いて、自らも体験を語った。「大腸の3分の2を切り」「排便に時間がかかる」が、治療を終えた現在は健康状態も安定している。聴いていた女性が安堵(あん・ど)の表情を浮かべた。言葉を交わさなくても分かる。彼女も大腸がんだ。「同じ病気を闘う者どうし、瞬時に共有できるものがある。そういったつながりを、互いの生きる力につなげたい」と言う。

かつてあった「がんイコール死」のイメージは薄れ、がんはずいぶんオープンに語られるようになった。それでも周囲に伝えられない人は多い。RFLを、「ひとりじゃない」と思える場として定着させたいと願う。米国のように、常にどこかでRFLが行われ、気軽に参加できる社会が目標だ。

福岡市で福祉用品や日用家庭雑貨の販売会社を営むかたわら3人の子どもを育て、地元の自治会長や保護司も務める。「命をなくしかけたからこそ色々なことをやりたい。過去を振り返るのは、最期に目を閉じる前だけがいい」。米国の科学者レイチェル・カーソンの一文を机のデスクマットにはさむ。「私(は)いつも すでにしたことよりも これからしようとすることに 興味があります」

今年の福岡のRFLは9月17、18日、福岡市東区の九大箱崎キャンパスである。問い合わせは芝田さん(080・3998・6500)へ。

身長172センチ、体重105キロ。真っ黒に日焼けした顔でガハハと笑い、一緒に昼食を食べれば「ライス大盛りで」。本当にがん？

失礼を承知で尋ねた。「よく言われます。でも、こんなタイプもいるんです」。私がこれまで知っている「がん」の姿は、亡くなった祖父やホスピスの取材で出会った人たち。やせ細った姿に、「そういうものだ」とイメージを固めていた自分に気がついた。

がんを生きる人の中にもさまざまな「生」がある。そんな当たり前のことを教えられた取材だった。(山下知子)